学校における「自分の言葉」の探求
ーオーセンティシティの視点からー

○黒田 友紀（日本大学）
○金田 裕子（宮城教育大学）
○北田 佳子（埼玉大学）
浅井 幸子（東京大学）
申 智媛（帝京大学短期大学）
望月 一枝（日本女子大学・客員研究員）
玉城 久美子(お茶の水女子大学附属高等学校)
柴田 万里子（青山学院大学・非常勤講師）

１．研究の目的

学校では、「あなたはどう思いますか」「自分の言葉で表現しましょう」「あなたの本当の気持ちを話してください」という問いかけが、授業でもそれ以外の指導の場面でも多く発せられている。しかし学校において、自分の言葉で本当のことを語ることは、教師にとっても子どもにとってもそれほど簡単なことではない。佐藤学（1994）が指摘していたように、学校や教室は、「教師にも子どもにも、自己の真実に忠実に生きる場所」、すなわち、オーセンティシティ（真正性）が保障され実現される場所としてよりも、「常に他者の価値観・要求・意思に合わせて思考し行動することを要求される場所」になっているからである。では、学校において「オーセンティシティ」が保障され実現されるということは、具体的にどのようなことを意味し、どのようにして可能となるのだろうか。

本研究では、O 市立 A 小学校の学校改革において「自分の言葉」を語ることが大切にされていたことに着目し、学校においてオーセンティシティが保障され実現される過程を考察する。具体的には、学校において「自分の言葉を語る」とはどのようなことであり、教師と子どもの対話において、それがどのように可能になっているかを明らかにすることを目指す。

２．研究の課題

本研究では、A 小学校における自分の言葉で本当のことを語る事例を分析するために、オーセンティシティ概念に着目する。オーセンティシティを扱う研究は、日本においても蓄積されつつある（佐藤 1994, 石井 2011, 佐藤 2012）。しかし、どのような意味でオーセンティシティが用いられているかはそれぞれ異なる。オーセンティシティには「ほんもの」という意味があるが、真正性は学習の先にどのような本物を措定するかによって、3 つに分類できるという（髙木・阿部・小山・藤川 2017）。第一は、真正性の探求が倫理的実践であり、「真正の学習とは、自らの在り様を模索する倫理的学習である」（佐藤 1994）というように、その倫理性へ着目していること、第二は、専門家の専門的知識にもとづく学びとして、科学や学問へ着目していること、第三は、実際の生活や社会で直面するような状況に即して問題場面を考えるというように、日常生活

や社会における実践へ着目していることである。本研究では、第一の真正性の倫理性に着目する。なぜなら、第一の倫理的な実践としてのオーセンティシティが十分に議論されていないだけでなく、第二、第三の系譜における実践を問い直す重要な契機を含むと考えられるからである。そして何より、A小における「自分の言葉」の重視は、この第一の倫理的なオーセンティシティの概念において捉えうる。

そこで、第一の課題として、教育や授業においてオーセンティシティ概念を扱う日本および海外の研究を概観し、その倫理的側面を扱う研究について整理する。第二に、A 小学校の学校改革のなかで、自分の言葉を大切にする実践とその語りに着目して、学校においてどのように自分の言葉を語り、いかにそれが可能になっているのかを明らかにする。

３．研究の方法

A 小学校の実践と語りの分析については、200x 年から 201x 年の 9 年間の学校改革の期間に、A 小学校に勤務した教師（校長、教諭、養護教諭）に対して行ったインタビュー調査と文書資料を分析対象とする。インタビューはナラティブ探究の方法によって検討する。具体的には、インタビューの文字起こしと文書資料から、「自分の言葉で語ること」や「本当のことを語ること」に関する語りやエピソードを取り出して検討する。

４．考察

オーセンティシティを道徳的理想として捉えるチャールズ・テイラー（Taylor, C）や、高等教育や成人教育領域の授業における真正性の研究やオーセンティックな教師の研究では、対話を通して自己の在り方を問い、重要な地平に照らして学習者にとって何が最善の利益であるかを判断し実践することが重視されている。このような「オーセンティシティ」の視点から A 小の学校づくりを検討したところ、教師たちと子どもたちの相互的な対話を通して、規範的な声を語っている自らに気づいたり、自分の本当の声を探したりすることによって、自分の本当の声を回復し、A小の「みんな」にとって何が最善かを模索する過程が見出された。当日の報告では、いくつかの語りの分析から、学校において教師も子どもも自分の言葉で本当のことを語ることが、自分の言葉とオーセンティシティを回復する過程であることを示す。

【参考文献】

石井真英（2011）「パフォーマンス評価をどう実践するか」 田中耕治編著 『パフォーマンス評価－思考力・判断力・表現力を育む授業づくり－』 ぎょうせい

佐藤学（1994）「教室という政治空間－権力関係の編み直しへ」 森田尚人・藤田英典・黒崎勲・片桐芳雄・佐藤学編 『教育のなかの政治』 世織書房 3-30 頁

佐藤学（2012）『学校を改革する－学びの共同体の構想と実践』 岩波ブックレット No. 842 岩波書店

髙木啓・安部朋世・小山義徳・藤川大祐（2017）「授業における『真正性』の学際的検討」『千葉大学教育学部研究紀要』 第 65 巻 179-185 頁

チャールズ・テイラー（田中智彦訳）（2004）『〈ほんもの〉という倫理 近代とその不安』 産業図書